

構造設計標準仕様書

適用は ■ 印を記入する。

1. 建築物の構造内容

- (1) 工事名称 県立大学 合同棟 ピロティ 増築工事
建築場所 富山県射水市
- (2) 構造種別 ☐ 新築 ☒ 増築 ☐ 増改築 ☐ 改築
- (3) 構造種別
☐ 木造 (W) ☐ 補強コンクリートブロック造 (C B) ☒ 鉄骨造 (S)
☒ 鉄筋コンクリート造 (R C) ☐ 壁式鉄筋コンクリート造 (W R C)
☐ 鉄骨鉄筋コンクリート造 (S R C) ☐ 壁式プレキャスト鉄筋コンクリート造 (W P R C)
☐ プレキャスト鉄筋コンクリート造 (P R C)
- (4) 階 数
1 階
- (5) 主要用途
- (6) 屋上付属物
☐ 広告塔 ☐ 高架水槽 kN ☐
☐ 煙 突 ☐ キュービクル kN ☐
- (7) 増築計画 ☐ 有 ☐ 無
- (8) 付帯工事
☐ 門塙 ☐ 擁壁 ☐ 煙突 ☐
- (9) 特別な荷重
☐ エレベーター ☐ リフト kN ☐ ホイスト kN
☐ 倉庫積載床用 N/m² ☐ 防火水槽 kN
- (10) その他

2. 使用構 造 材 料

(1) コンクリート

適用箇所	種類	設計基準強度 Fc=N/mm ²	スランプcm	備 考
捨コンクリート	普通	18	15	
土間コンクリート	普通	21	15	+ T + Δ F (3N/mm ²)
基礎	普通	21	15	+ T + Δ F (3N/mm ²)

- (2) コンクリートブロック (C B)
- ☐ A種 ☐ B種 ☐ C種 厚 ☐ 100 ☐ 120 ☐ 150 ☐ 190

(3) 鉄 筋

	種類	径	使用箇所	継手工法
異形鉄筋	☒ SD295A	D10～D16		☒ 重ね継手
	☐ SD295B			☐ ガス圧接継手
	☐ SD345	D19以上		☐ 特殊継手
	☐ SD390			()
溶接金網	☐			

(4) 鉄 骨

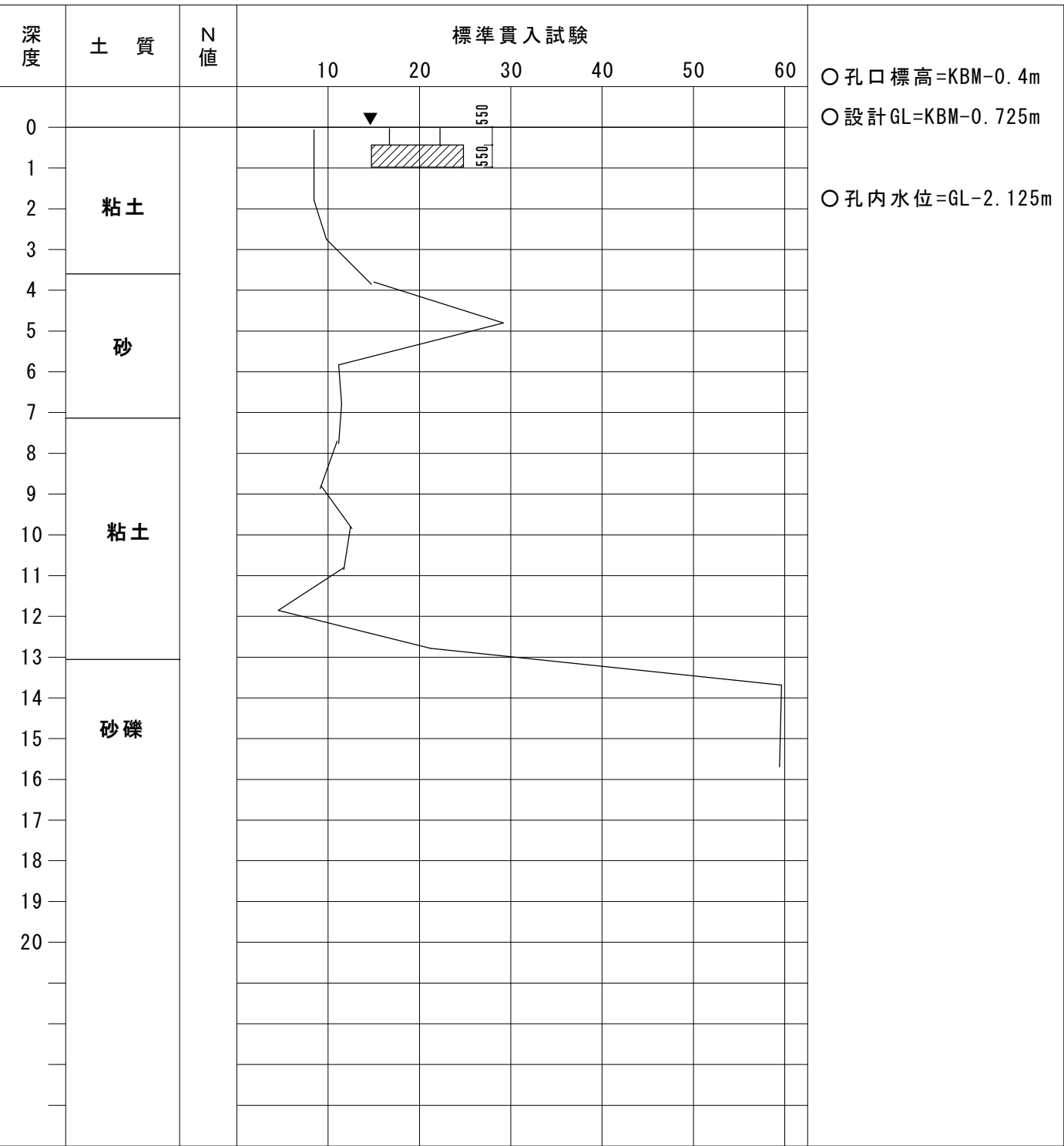
	種類	使用箇所	現場溶接	備 考
鋼 材	☒ SS400 ☐ SM490A		☐ 有 ☒ 無	
	☒ STKR400 ☐ STK400		☐ 有 ☒ 無	
	☐ BCR295		☐ 有 ☒ 無	
	☐ SN490B(C) ☐ SN400B		☐ 有 ☒ 無	
	☒ SSC400		☐ 有 ☒ 無	

- (5) ボルト
- ☒ 高力ボルト ☐ 普通、F10T ☒ 特殊、S10T 認定品 (■M12、□M16、□M20、□M22)
☒ 中ボルト ☒ M12 ☐ M16 高力ボルトすべり係数試験 ☐ 要 ☒ 否
☒ アンカーボルト SS400 ダブルナット
☐ スタッドボルト d=13 ☐ d=16 呼び長さ ☐ 80 ☐ 100 ☐ 120
☐ d=19 ☐ d=22 呼び長さ ☐ 80 ☐ 100 ☐ 130 ☐ 150
☐ メッキ高力ボルト F8T 認定品 (□M12、□M16、□M20、□M22)

- (6) 屋根、床、壁
- 使用箇所
- ☐ 押出成型セメント版 厚 60
☐ 折 版 厚 0.8 H＝170
☐ デッキプレート 厚 1.2 (合成床版の場合は鉄骨構造標準図による)
☐ フラットデッキプレート H＝75 厚 1.0
☐ 特殊デッキプレート
☐ ボイドスラブ

3. 地 盤

- (1) 地盤調査資料
☒ 有 (■敷地内 ☐ 近隣) ☒ ボーリング調査 ☐ 平板載荷試験 ☐ 水平地盤反力係数の測定
☐ 無 (調査予定 ☐ 有 ☐ 無)
- (2) 地盤調査計画
☐ ボーリング調査 ☐ 静的貫入試験 ☐ 標準貫入試験 ☐ 水平地盤反力係数の試験
☐ 土質試験 ☐ 物理探査 ☐ 平板載荷試験 ☐
- (3) 地盤調査及び試験杭の結果により、杭長、杭種、直接基礎の深さ、形状、を変更する場合もある
- (4) ボーリング標準貫入値、土質構成 (基礎、杭の位置を明記すること)



4. 地 業 工 事

- (1) 直接基礎 ■ベタ基礎 ☐ 布基礎 ☐ 独立基礎 試験掘 ☐ 有 ☐ 無 (ヶ所)
深さGL－0.55 m 長期許容支持力度 50kN/m² 載荷試験 ☐ 有 ☐ 無 (ヶ所)
基礎下地盤改良 ■有 (ソイル改良) ☐ 有 (浅層改良) ☐ 無 深さGL－1.10 m
- (2) 杭基礎

杭 種	材 料	施工法	備 考
☐ R C ☐ P C	P C (□A種 □B種 □C種)	○打ち込み	
☐ P H C □ H 鋼	P H C (□A種 □B種 □C種)	○埋込み	
☐ 鋼管 ☐ 節杭	鋼材 □ SS400 □ STK400	○ﾌﾞﾚｯﾄﾞｰﾘﾝｸﾞ (拡大) 根固め	☐
☐	□	□	
☐ 場所打ちコンクリート杭	コンクリート Fc= N/mm ² セメント量 kg/m ³ 鉄 筋 主筋 SD345 HOOP SD295A	○オールケーシング □拡底杭 ○リバースサーキュレーション ○アースドリル □ミニアース □BH □深礎 □手掘 □機械掘	拡底杭 日本建築センター認定 第 号 年 月 日

- 杭仕様 ☐ 施工計画書承認 ☐ 杭施工結果報告書
- 試験杭 (☐ 有 ☐ 無) (☐ 打ち込み ☐ 載荷 本) 試験掘 (☐ 有 ☐ 無) (本)

杭径 (mm)	設計支持力 (kN)	杭の長さ (m)	本数	特記事項

5. 鉄 筋 コ ン ク リ ー ト 工 事

- (1) コンクリート
- ☒ コンクリートは J I S 認定工場の製品とし施工に関しては J A S S 5 による。
☒ セメントは、J I S R5210の普通ポルトランドセメントを標準とする。
☒ 調合計画は、工事開始前に工事監理者の承認を得ること。
☒ 寒中、暑中、その他特殊コンクリートの適用を受ける期間に当る場合は、調合、打ち込み、養生、管理方法等必要事項について、工事監理者の承認を得ること。
☒ フレッシュコンクリートの塩化物測定は、原則として工事現場で (財) 国土開発技術研究センターの技術評価をうけた測定器を用いて行い、試験結果の記録及び測定器の表示部を一回の測定ごとに撮影した写真 (カラー) を保管し承認を得る。測定検査の回数は、通常の場合、1日1回以上とし、1回の検査における測定試験は、同一試料から取り分けて3回行い、その平均値を試験値とする。
☒ 構造体コンクリート現場の圧縮強度試験供試体 (J A S S 5 T－603) は、現場水中養生、または現場封かん養生とし、採取は打ち込み区ごと、打ち込み日ごととする。また、打ち込み量が150m³をこえる場合は150m³ごとまたは、その端数ごとに一回を標準とする。一回に採取する供試体は、適当な間隔をおいた3台の運搬車からその必要本数を採取する。1回当りの供試体の数量 (標準養生) ☐ 1週用 3本 ☐ 4週用 3本 (現場養生) ☐ 1週用 3本 ☐ 4週用 3本 (現場養生) ☐ 型枠用 3本 ☐ 建方用 3本
☒ ポンプ打ちコンクリートは、打ち込む位置にできるだけ近づけて垂直に打ちコンクリートの自由落下高さは、コンクリートが分離しない範囲とする。ポンプ圧送に際しては、コンクリート圧送技士または同等以上の技能を有するものが従事すること。なお、打ち込み継続中における打継ぎ時間間隔の限度は、外気温が25℃未満の場合は150分、25℃以上の場合 は120分以内とする。
- (2) 鉄 筋
- ☒ 鉄筋は J I S G3112の規格品を標準とする。
☒ 鉄筋の加工寸法、形状、かぶり厚さ、鉄筋の継手位置、継手の重ね長さ、定着長さは「鉄筋コンクリート構造配筋標準図 (1) (2)」による。
(壁式鉄筋コンクリート造は除く)
☒ D19未満は、すべて重ね継手とする。継手 (D19以上) をガス圧接とする場合は、日本圧接協会「鉄筋のガス圧接工事標準仕様書」による。
☒ ガス圧接部の抜き取り検査は、同一作業班が同一日に施工した圧接箇所ごと (200箇所を超えときは、200箇所ごと) に1回行い、1回の試験は3本以上とする。
外観検査 ☐ 有 ☐ 無、引張試験 ☐ 有、超音波探傷試験 ☐ 有 ☐ 無
☒ 柱の帯筋 (H O O P) の加工方法は、■H型 (タガ型) ☐ W型 (溶接型) ☐ S型 (スパイラル型) とする。
- (3) 型 枠
- ☒ 材料 合板厚 12mmを標準とする。 ☒ ラス型枠は原則不可とする。
☒ ラス型枠を使用する場合は専門業者による施工とし、業者の選定には監理者の承認を得ること。
☒ 型枠在置期間

種類 部位 セメントの種類 在置期間 平均気温 コンクリート の 圧縮強度	せ き 板		支 柱			
	基礎、はり側、柱、壁	スラブ下、はり下	スラブ下		はり下	
	早強ポルトランドセメント	普通ポルトランドセメント	早強ポルトランドセメント	普通ポルトランドセメント	早強ポルトランドセメント	普通ポルトランドセメント
	高炉セメント A 種 シリカセメント A 種	高炉セメント A 種 シリカセメント A 種	高炉セメント A 種	普通ポルトランドセメント A 種	高炉セメント A 種	普通ポルトランドセメント A 種
15℃以上	2	3	4	6	8	17
5℃～15℃	3	5	6	10	12	25
5℃未満	5	8	10	16	15	28
コンクリートの圧縮強度	50 kg/cm ²		設計基準強度の50%		設計基準強度の	
					80%	100%

- 注) 1 片持ばり、庇、スパン 9.0m以上のはり下は、工事監理者の指示による。
- 注) 2 大梁の支柱の盛りかえは行わない。また、その他のはりの場合も原則として行わない。
- 注) 3 支柱の盛りかえは、必ず直上階のコンクリート打ち後とする。
- 注) 4 盛りかえ後の支柱顶部には、厚い受板、角材または、これに代わるものを置く。
- 注) 5 支柱の盛りかえは、小ばりが終わってから、スラブを行う。
一時に全部の支柱を取り払って、盛りかえをしてはならない。
- 注) 6 上記以外のセメントを使用する場合は工事監理者の指示による。

6. 鉄 骨 工 事

- (1) 鉄骨工事は指示のない限り下記による
☒ 日本建築学会「J A S S 6」 「鉄骨工事技術指針」
☐ 鋼材倶楽部「建築鉄骨工事施工指針」
- (2) 工事監理者の承認を必要とするもの
☒ 製作工場 ☒ 製作要領書 ☒ 工作図 ☒ 施工計画書
☒ 国土交通大臣による認定工場 (グレード 以上)
☒ 材料規格証明書または試験成績書
☒ 鋼材 ☒ 高力ボルト ☒ 特殊ボルト ☒ スタッドボルト
☒ 社内検査表 ☐
- (3) 工事監理者に検査報告連絡し指示を受けるもの
☒ 現寸検査 ☒ 組立・開先検査 ☒ 製品検査 ☒ 建方検査 ☐
- (4) 接合部の溶接は下記によること
☒ 日本建築学会「溶接工作基準、同解説Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅹ」
☒ 鉄骨造建築物の溶接工事に関する指導指針 (建築構造設計指針第12章)
- (5) 溶接及び接合部を検査し工事監理者に報告すること
☒ 溶接及び接合部の検査報告

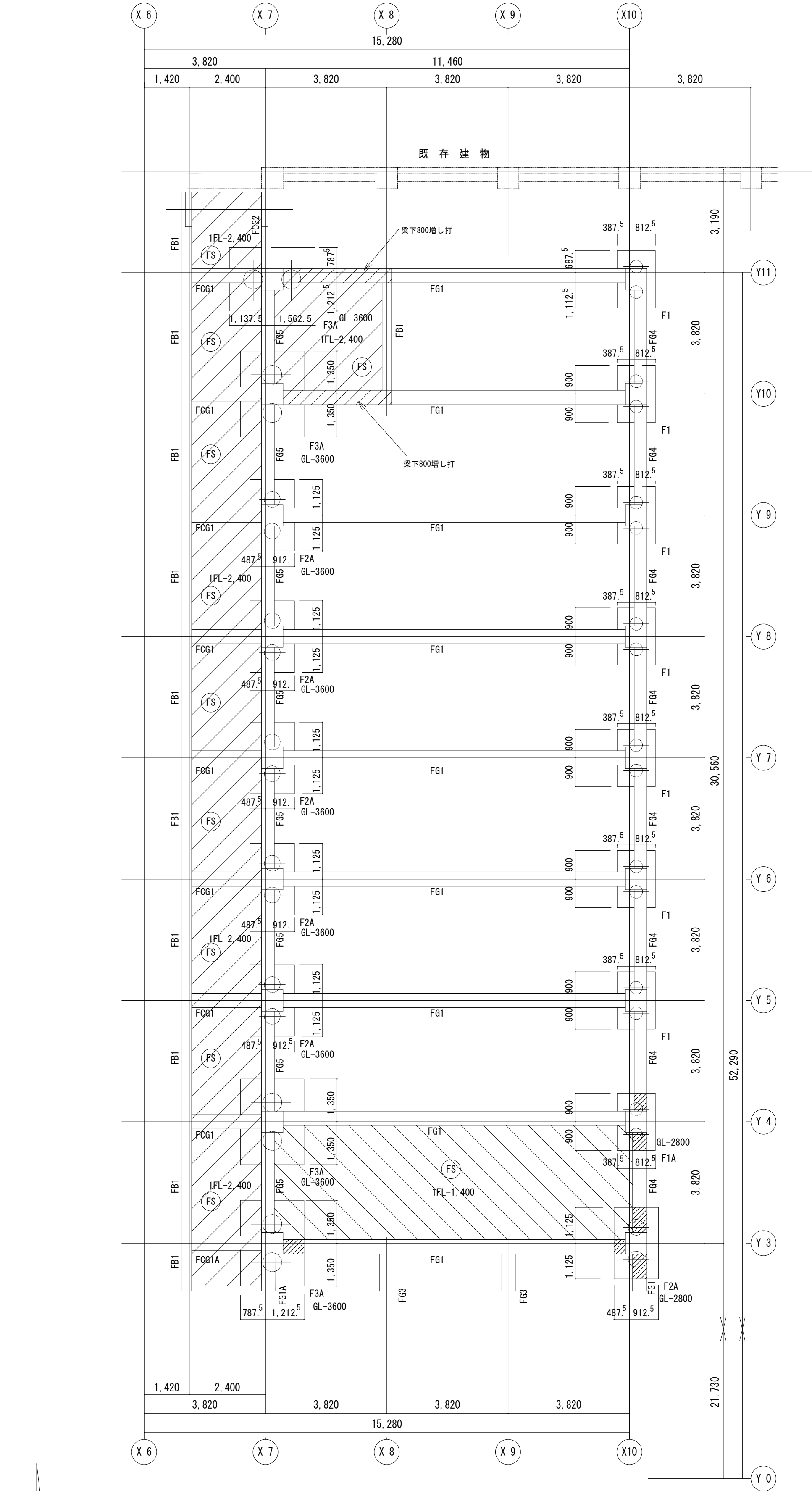
検 査 箇 所	検 査 方 法	検査率または検査数			備 考
		社 内	第三者	工事監理者	
■ 突合せ溶接部	超音波探傷試験	%	%	%	
□	外観（目視）検査	%	%	%	
□	マクロ試験・その他	個	個	個	
第三者検査機関	C I W認定検査会社によること				第三者検査機関とは、工事施工者が受入れ検査を代行させるために自ら契約した検査会社をいう。

- ☒ 高力ボルトは「J I S B1186の高力ボルト」を標準とする。摩擦面の処理は黒皮などを座金外径2倍以上の範囲でショットブラスト、グラインダー掛け等を用いて除去した後、屋外に自然放置して発生した、赤さび状態ですべり係数が0.45以上確保できるものを標準と
- ☒ 高力ボルトの締付けに使用する機器はよく調整されたものを使用し、締付けの順序は部材が十分密着するよう注意して行う。また、締付けは原則として2度締めとする。
締付け後の検査は、各締付け工法別に適切な締付けが行なわれているか検査する。
- (6) 防錆塗料
- ☒ 防錆塗装の範囲は、高力ボルト接合の摩擦面及びコンクリートで被覆される以外の部分とする。錆止めペイントは、J I S K5625、2回塗りを標準とする。
ただし、建築物の外周部や鉄骨の腐食が懸念される部位で、湿式ロックウール吹付けを施工する場合は、J I S K5622、2回塗りとする。
☒ 現場における高力ボルト接合部及び接合部の素地調整は入念に行ない、塗装は工場塗装と同じ錆止めペイントを使用し2回塗りとする。

7. 地 盤 改 良 工 事

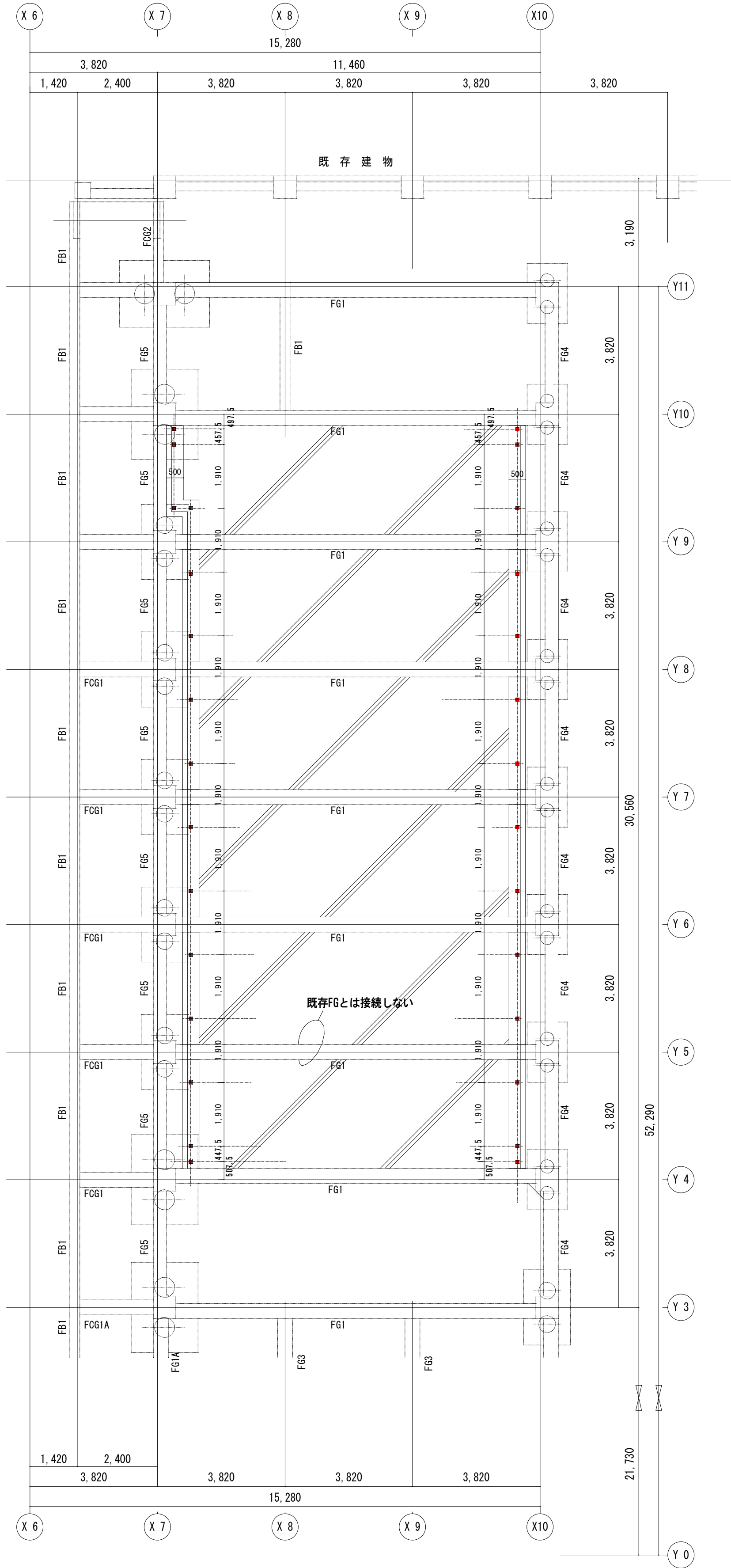
☐ 深層混合処理工法 (ソイルセメントコラム) 特記仕様 (別図仕様書による)
1) . ソイルセメントコラム工法とは、セメントを主体とした固化工材をスラリーとして土壌に注入し、土壌とスラリーを攪拌混で機械的に混合攪拌することによってソイルセメントコラムを築造する工法をいう。
2) . 本工事はこの特記仕様書によるほか、日本建築センター「建築改良地盤の設計及び品質管理指針」による。
3) . 工事は専門業者による施工とし、業者の選定には監理者の承認を得ること。
4) . 工事に先立ち施工計画書及び、改良効果に関する設計検討書を提出し、監理者の承認を得ること。
5) . 改良材はセメント系固化工材とし、添加量は 350 kg/m ³ 程度 (配合試験により決定) とするが、250 kg/m ³ を最小添加量とする。
6) . 設計基準強度は Fc = 1.2N/mm ² とする。
7) 礫などの含有が多い場合や共回りの発生により、攪拌混合に支障をきたすおそれがある場合は、別途検討する。
8) . 品質管理は一軸圧縮試験 (1ヶ所) を行なうこと。
9) . 工事範囲 (基礎下、土間下)

☒ 浅層混合処理工法 (バックホウ改良等) 特記仕様
1) . 地盤改良とは、セメントを主体とした固化工材を土壌に注入し、土壌と混合攪拌することによって、改良地盤を築造する工法をいう。
2) . 本工事はこの特記仕様書によるほか、日本建築センター「建築改良地盤の設計及び品質管理指針」による。
3) . 工事は専門業者による施工とし、業者の選定には監理者の承認を得ること。
4) . 工事に先立ち施工計画書及び、改良効果に関する設計検討書を提出し、監理者の承認を得ること。
5) . 改良材はセメント系固化工材とし、添加量は 150 kg/m ³ 程度 (配合試験により決定) とする。
6) . 設計基準強度は Fc = 4.5 kg/cm ² とし、現場一軸圧縮強度 (28日強度) は、11.3 kg/cm ² とする。
7) . 品質管理は一軸圧縮試験 (1回) を行なうこと。
8) . 工事範囲 (直接基礎下部、土間下)
9) . 工法



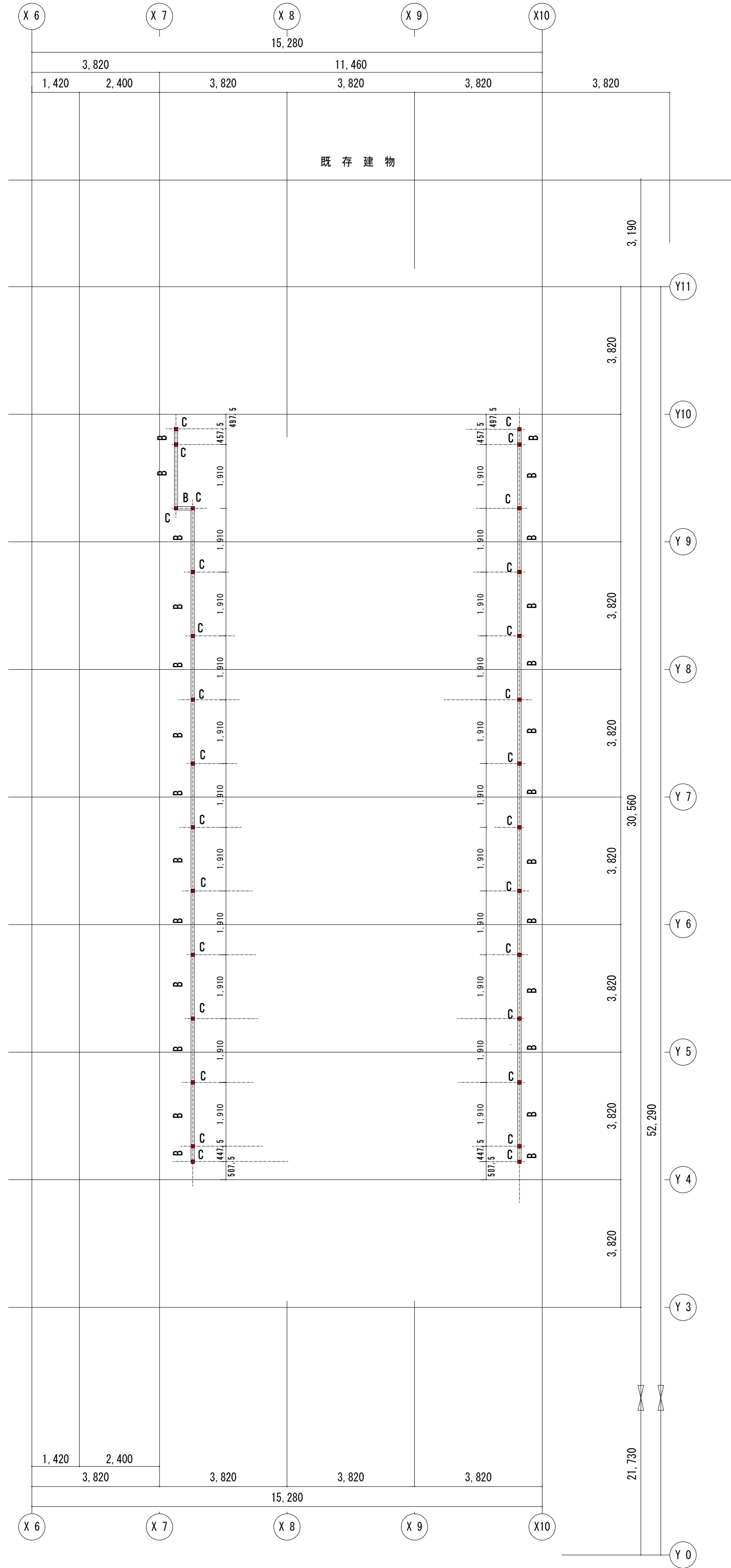
基礎伏図 1/100

凡例
表示無き基礎底は GL-1,800とする
表示無き地中梁天端は GL-200とする
ハッチ部分は 梁増し打を示す
ハッチ部下ピットを示す
梁貫通補強： 機械設備工事 位置、形状は機械設備図による



1階床伏図 1/100

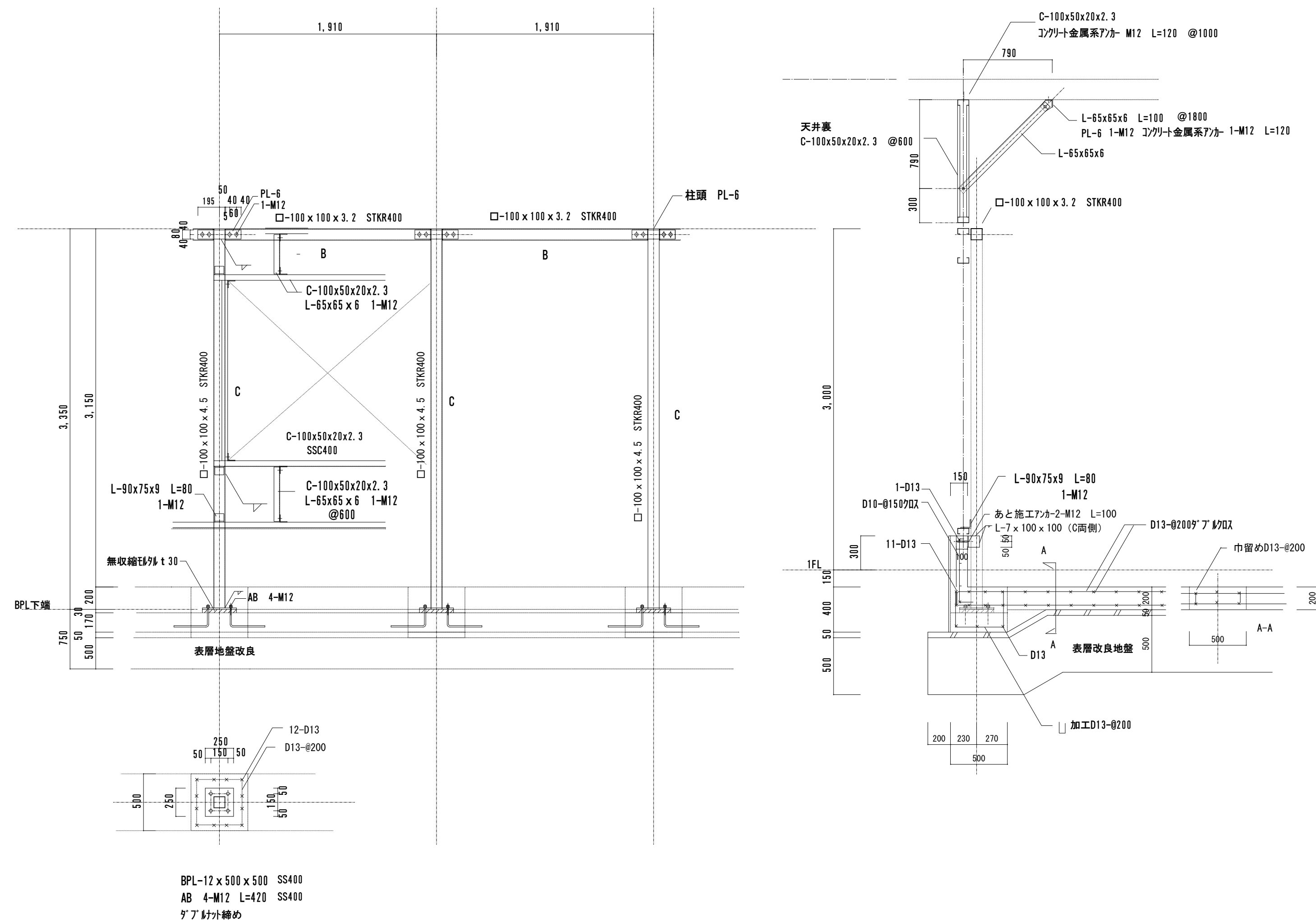
：C
：土間コンクリート t200 D13-@200φ7 1/40 土間下：地盤改良 H=500



1FL+3,000 梁伏図 1/100



==	C :	□-100 x 100 x 4.5	STR400	
==	B :	□-100 x 100 x 3.2	STR400	
-----	マツ :	C-100x50x20x2.3	SSC400	
-----	胴縁 :	C-100x50x20x2.3	SSC400	@600



鉄筋コンクリート構造配筋標準図（1）

※修正箇所は下線を引くこと

1. 一般事項

(1) 構造図面に記載された事項は、本標準図に優先して適用する。

(2) 記号

d…異形棒鋼の呼び名に用いた数値 丸鋼では径 D…部材の成 R…直径
@…間隔 r…半径 C…中心線 L…部分間の内法距離 h…部材間の内法高さ
S T…あばら筋 H O O P…帯筋 S. H O O P…補強帯筋 φ…直径又は丸鋼

2. 鉄筋加工、かぶり

(1) 鉄筋末端部の折曲げの形状

折曲げ角度	180°	135°	90°	折まげ角度90°はスラブ筋・壁筋の末端部またはスラブと同時に打ち込むT形およびL形梁のキャップタイにのみ用いる。 *片持スラブ上端筋の先端
図				
鉄筋の余長	4d以上	6d以上(*4d以上)	8d以上(*4d以上)	
折曲げ内法寸法Rは、SR235～SD345の径16およびD16以下は3d以上、SD295～SD345のD19～D38は4d以上、D41およびSD390は5d以上とする。 スラブ筋、壁筋には丸鋼は使用しない。				

(2) 鉄筋中間部の折曲げ形状 鉄筋の折曲げ角度90°以下

図	鉄筋の使用箇所 による呼称	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折り曲げ 内のり寸法(R)
	帯筋 あばら筋 スパイラル筋	SR235, SR295 SD295A・B SD345	16φ以下 D19以上	3d以上 4d以上
	上記以外の鉄筋	SD295A・B SD345 SD390	D16以下 D19～D25 D29～D41	4d以上 6d以上 8d以上

(3) 鉄筋の定着及び重ね継手の長さ

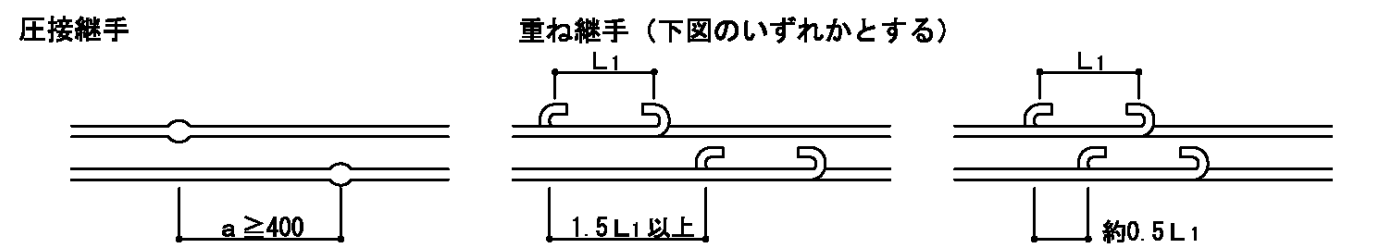
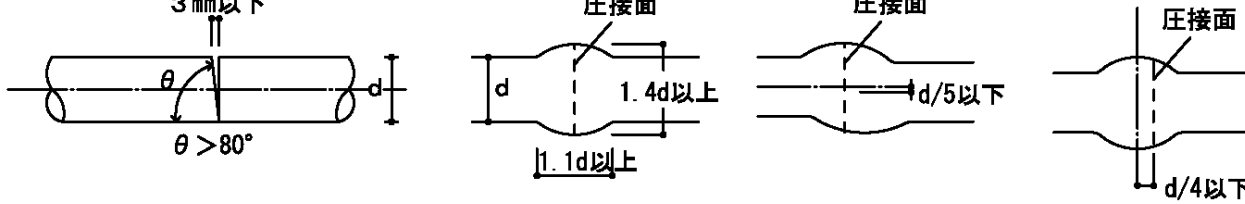
鉄筋の種類	普通、軽量コンクリートの設計基準強度の範囲 (N/mm ²)	定 着 の 長 さ			特別の定着及び重ね継手の長さ (L ₁)
		一般 (L ₂)	下 端 筋 (L ₃)		
			小 梁	スラブ	
S R 235	21, 24	35d フック付き	25d フック付き	150mm フック付き	35d フック付き
	18以下	45d フック付き			45d フック付き
S D 295A S D 295B S D 345	27～36	30d または 20dフック付き	25d または 15d フック付き	10d かつ 150mm以上	35dまたは25dフック付き
	21, 24	35d または 25dフック付き			40dまたは30dフック付き
	18以下	40d または 30dフック付き			45dまたは35dフック付き
S D 390	27～36	35d または 25dフック付き			40dまたは30dフック付き
	21, 24	40d または 30dフック付き			45dまたは35dフック付き

【注】許容応力度計算、許容応力度等計算、その他構造計算を要さない小規模建築物の場合は、梁主筋の柱への定着は40dとする

継手

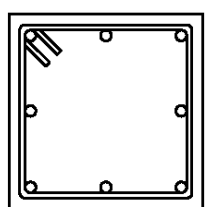
1. 末端のフックは、定着および重ね継手の長さに含まない
2. 継手位置は、応力の小さい位置に設けることを原則とする
3. 直径の異なる鉄筋の重ね継手長さは、細い方の鉄筋の継手長さとする
4. D29以上の異形鉄筋は、原則として、重ね継手としてはならない
5. 鉄筋径の差が7mmを超える場合は、圧接としてはならない

ガス圧接形状



(4) かぶり厚さ (単位: mm)

ひびわれ誘発目地部など鉄筋のかぶり、厚さが部分的に減少する箇所についても最少かぶり厚さを確保する。

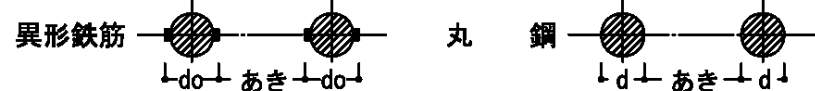


部 位		設計かぶり厚さ最少かぶり厚さ (mm)		
土に接しない部分	屋根スラブ	屋 外	30	20
	床スラブ	屋 外	30	20
	非耐力壁	屋 外	40 ⁽¹⁾	30 (20)
	柱	屋 内	40	30
	は耐力壁	屋 外	50 ⁽²⁾	40 ⁽³⁾ (30)
土に接する部分	擁		50 ⁽³⁾	40
	柱・はり・床スラブ・耐力壁		50	40 ⁽⁴⁾
	基礎・擁壁		70	60 ⁽⁴⁾

【注】(1) 耐久性上有効な仕上げのある場合、工事監理者の承諾を受けて30mmとすることができる。
(2) 耐久性上有効な仕上げのある場合、工事監理者の承諾を受けて40mmとすることができる。
(3) コンクリートの品質および施工方法に応じ、工事監理者の承諾を受けて40mmとすることができる。
(4) 軽量コンクリートの場合は、10mm増しの値とする。
(5) ()内は仕上げがある場合。
(6) 土に接する部分のかぶりは増加する厚さを打ち増しとする。

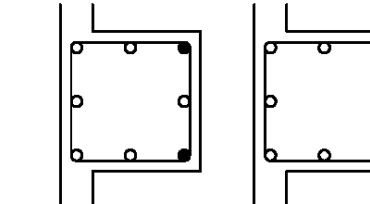
(5) 鉄筋のあき

丸鋼では径、異形鉄筋では呼び名に用いた数値1.5d以上
粗骨材の最大寸法の1.25倍以上かつ25以上



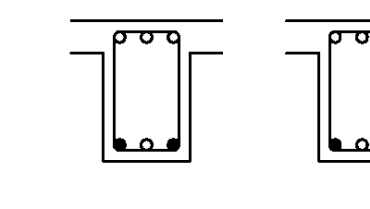
図の*印の鉄筋の重ね継手の

末端にはフックが必要



(6) 鉄筋のフック(a～fに示す鉄筋の末端部にはフックを付ける。)

- a. 丸鋼 b. あばら筋、帯筋 c. 煙突の鉄筋
d. 柱、梁(基礎梁は除く)の出すみ部分の鉄筋(右図参照)
e. 単純梁の下端筋
f. その他、本配筋標準に記載する箇所

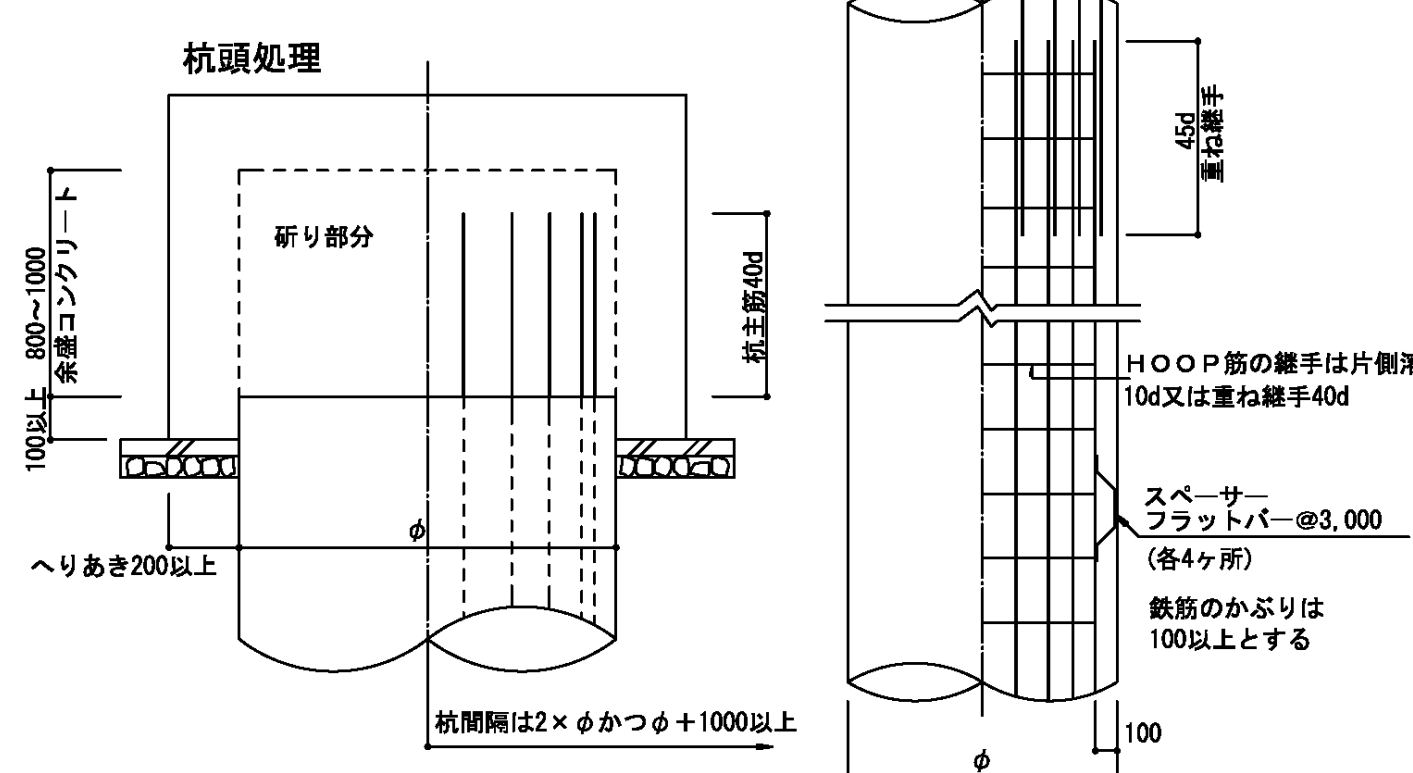


3. 杭 (地震力等の水平力を考慮して、別途検討すること。)

(1) PRC杭、又はPHC杭の全てに補強を行う

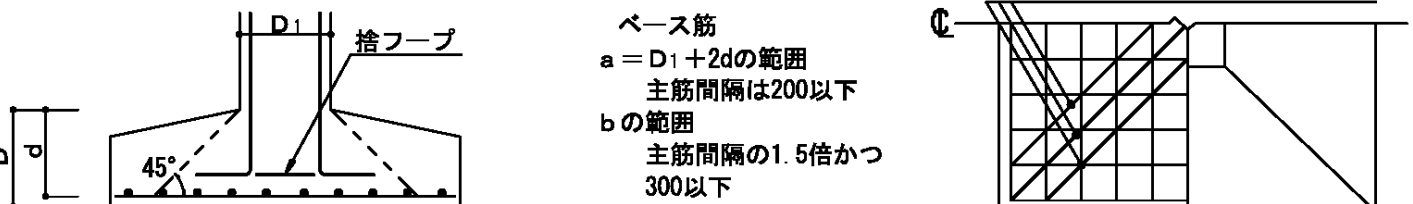
所定の位置に止まった場合		所定より低く止まった場合	
	補強筋 HOOP@150 基礎下端 コンクリート止め板		但しL≤φの場合(下げ止まりの影響をあらかじめ設計上考慮されている場合に限る) L>φの場合は工事監理者の指示による
杭 径	300φ、350φ、400φ	450φ、500φ、600φ	
補 強 筋	6-D13、8-D13	10-D13、8-D16、10-D16	
HOOP		D10-@150	

(2) 現場打ちコンクリート杭

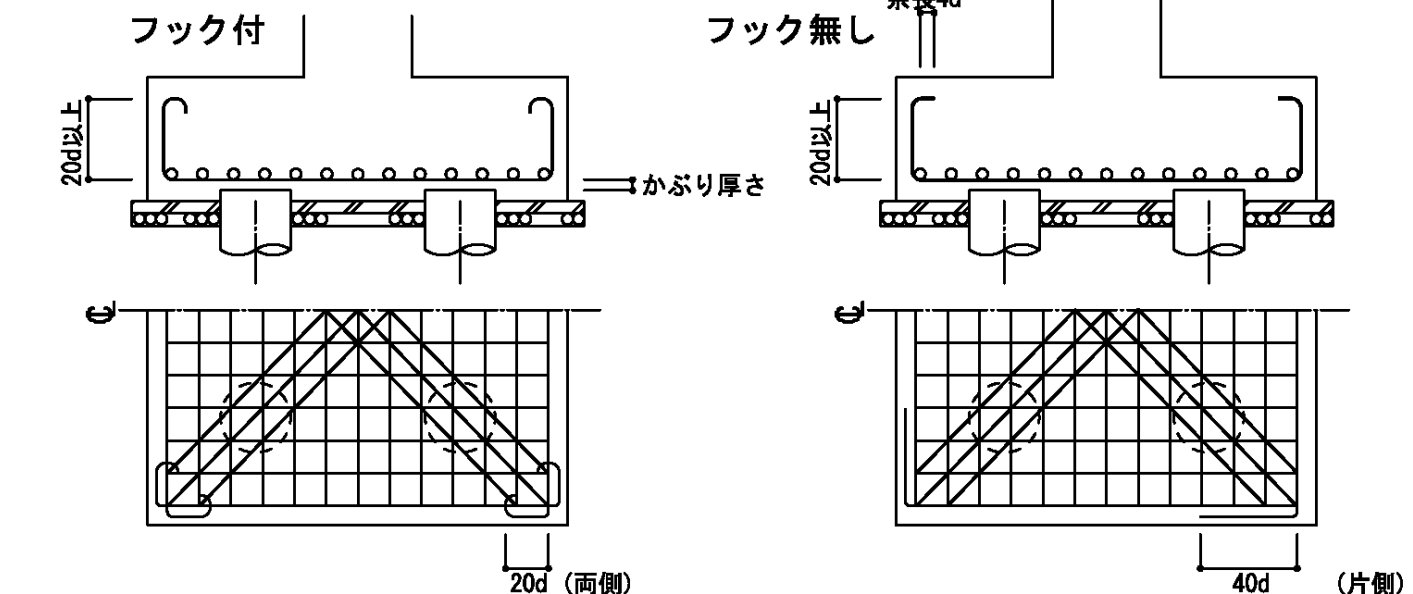


4. 基礎

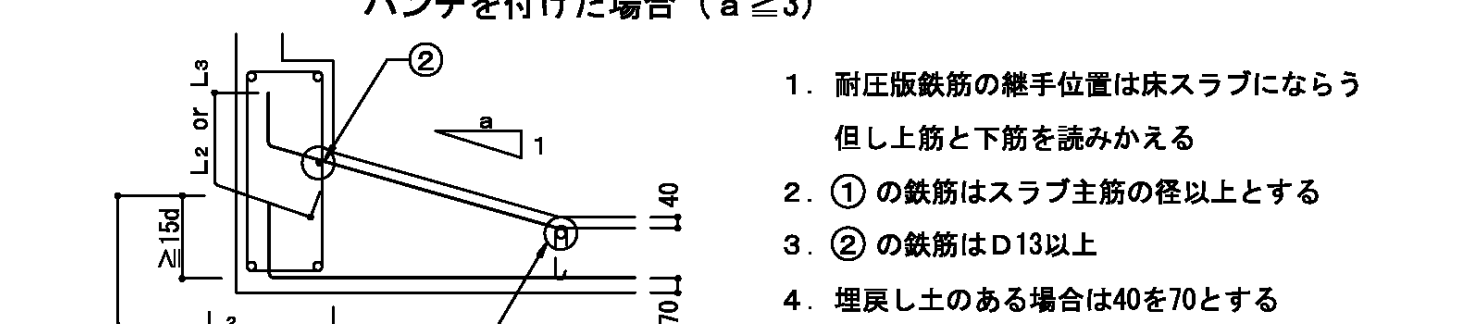
(1) 直接基礎



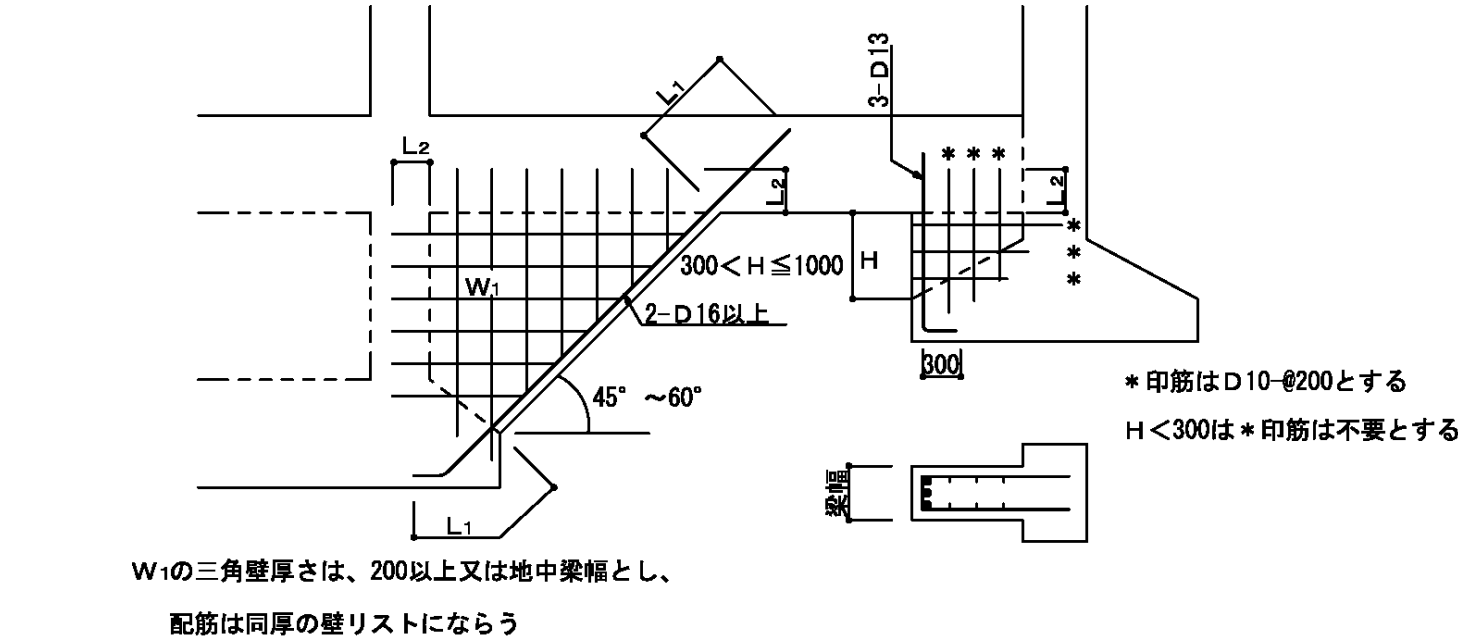
(2) 杭基礎



(3) ベタ基礎

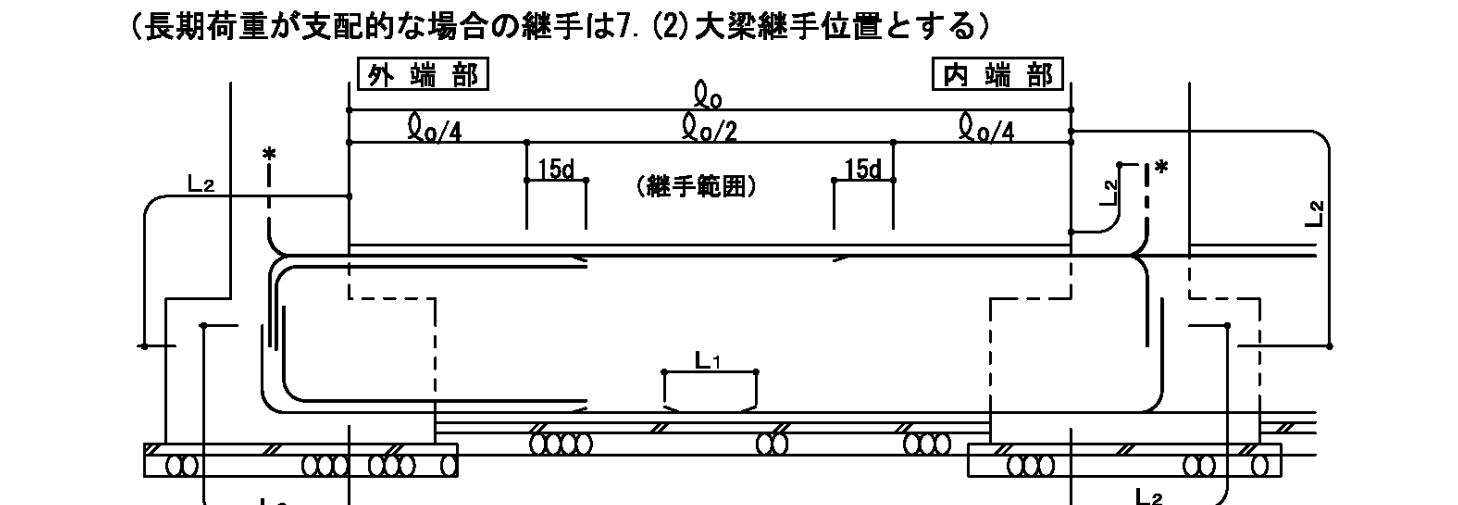


(4) 基礎接合部の補強

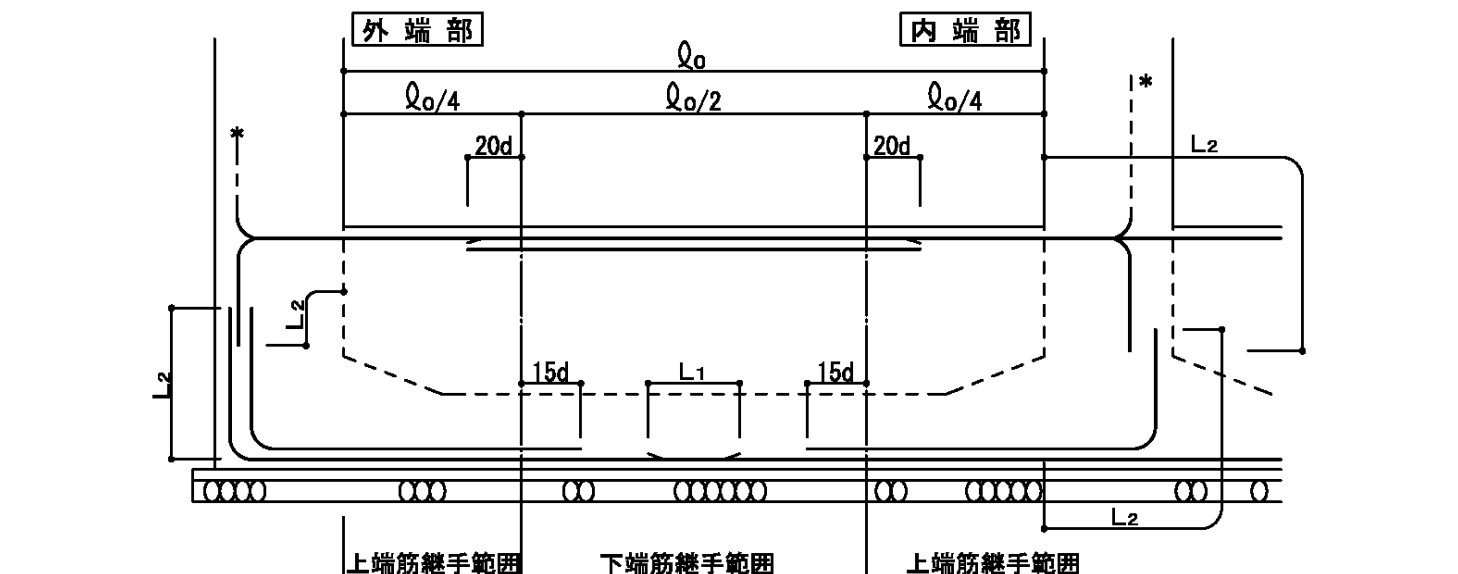


5. 地中梁

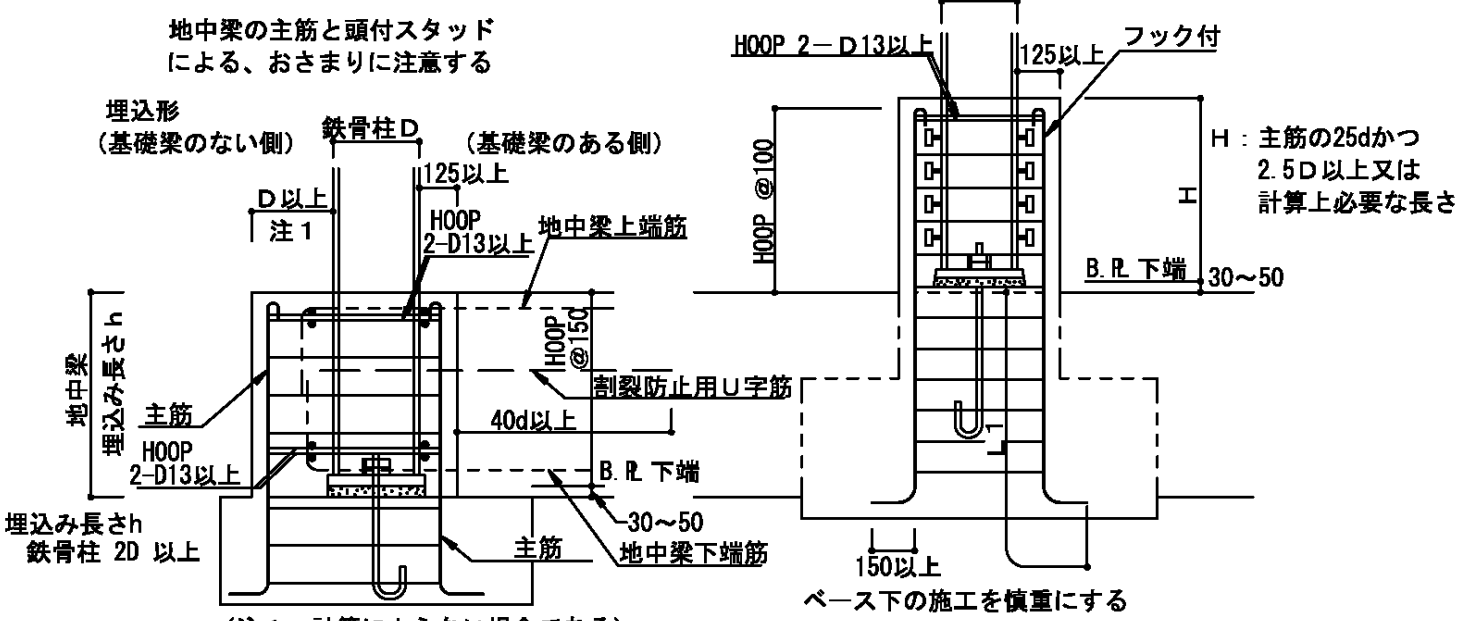
(1) 独立基礎、杭基礎の場合(定着、継手)



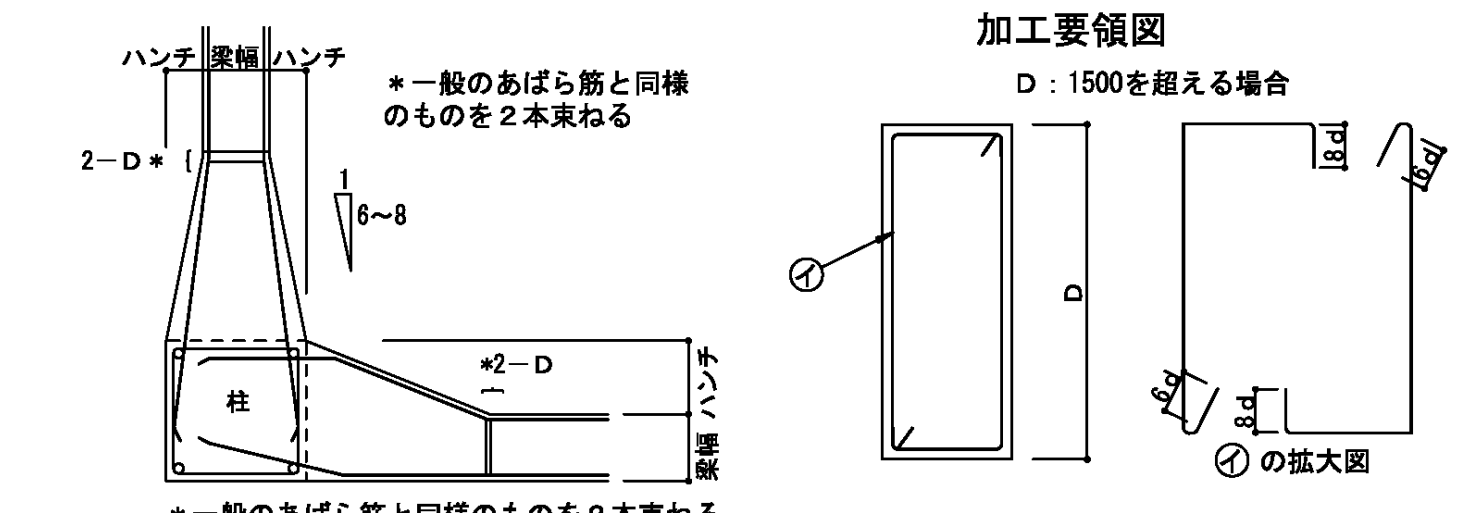
(2) 布基礎、べた基礎の場合(定着、継手)



(3) 小規模鉄骨造柱脚固定の配筋

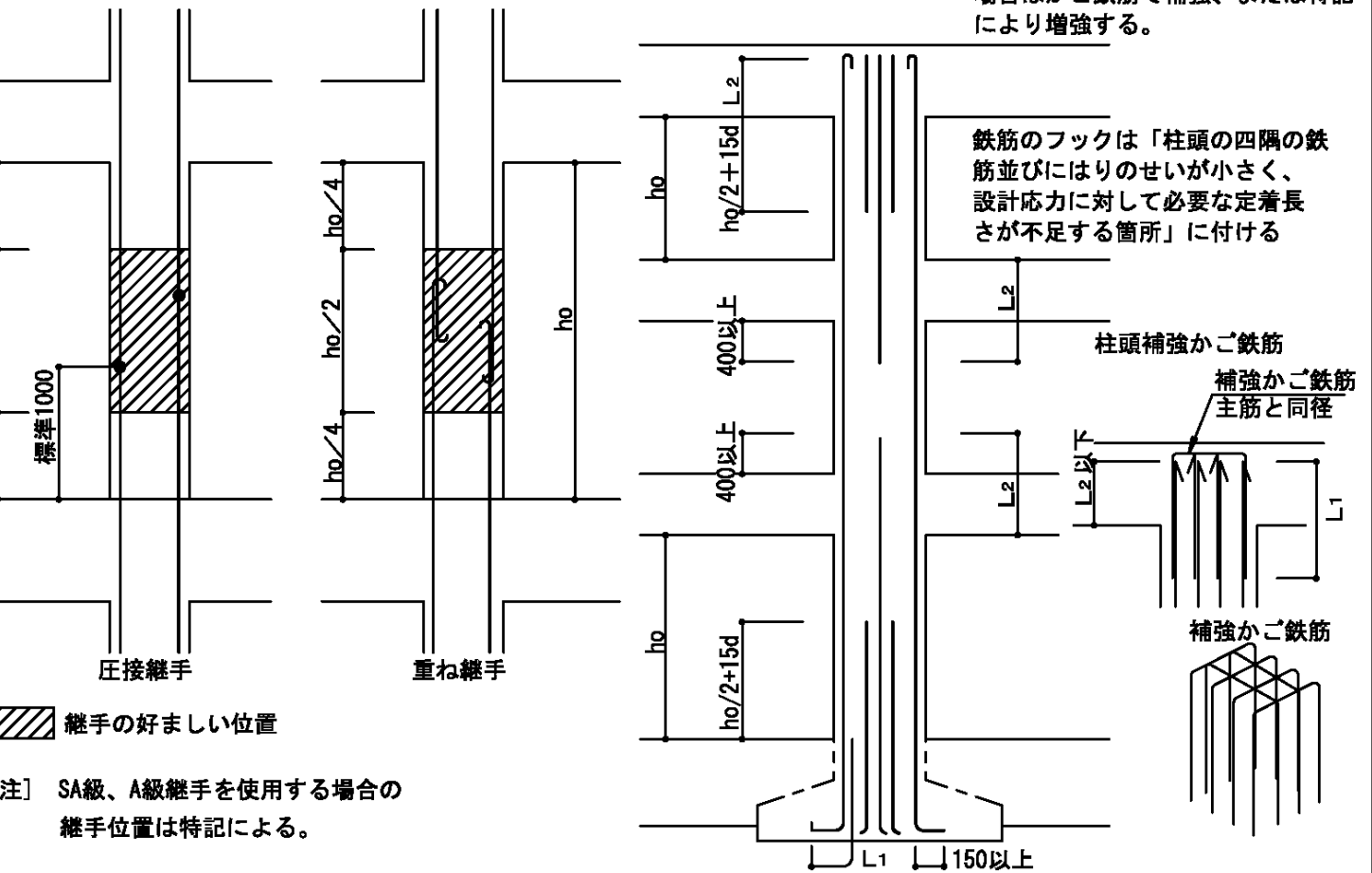


(4) 水平ハンチの場合のあばら筋加工要領

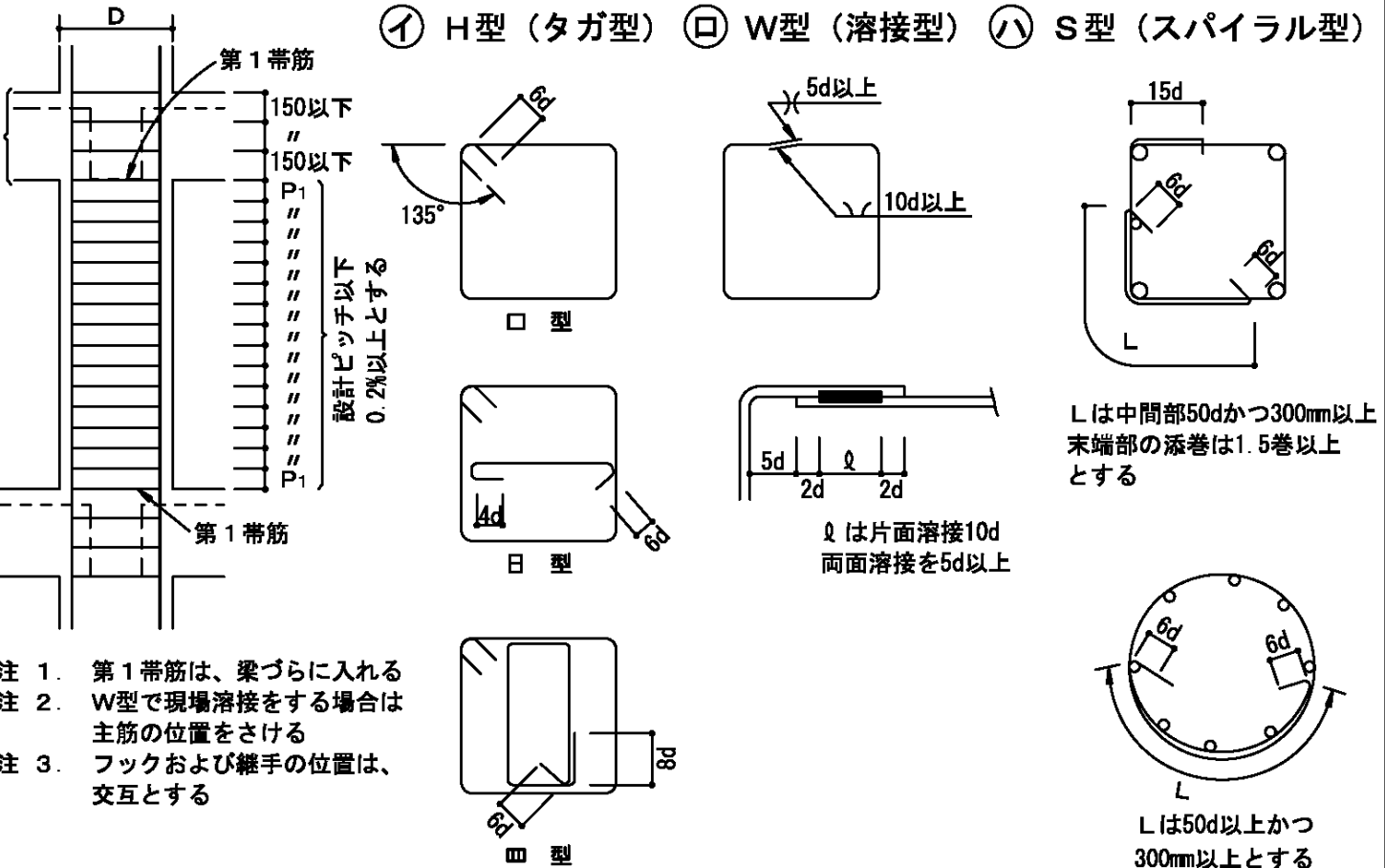


6. 柱

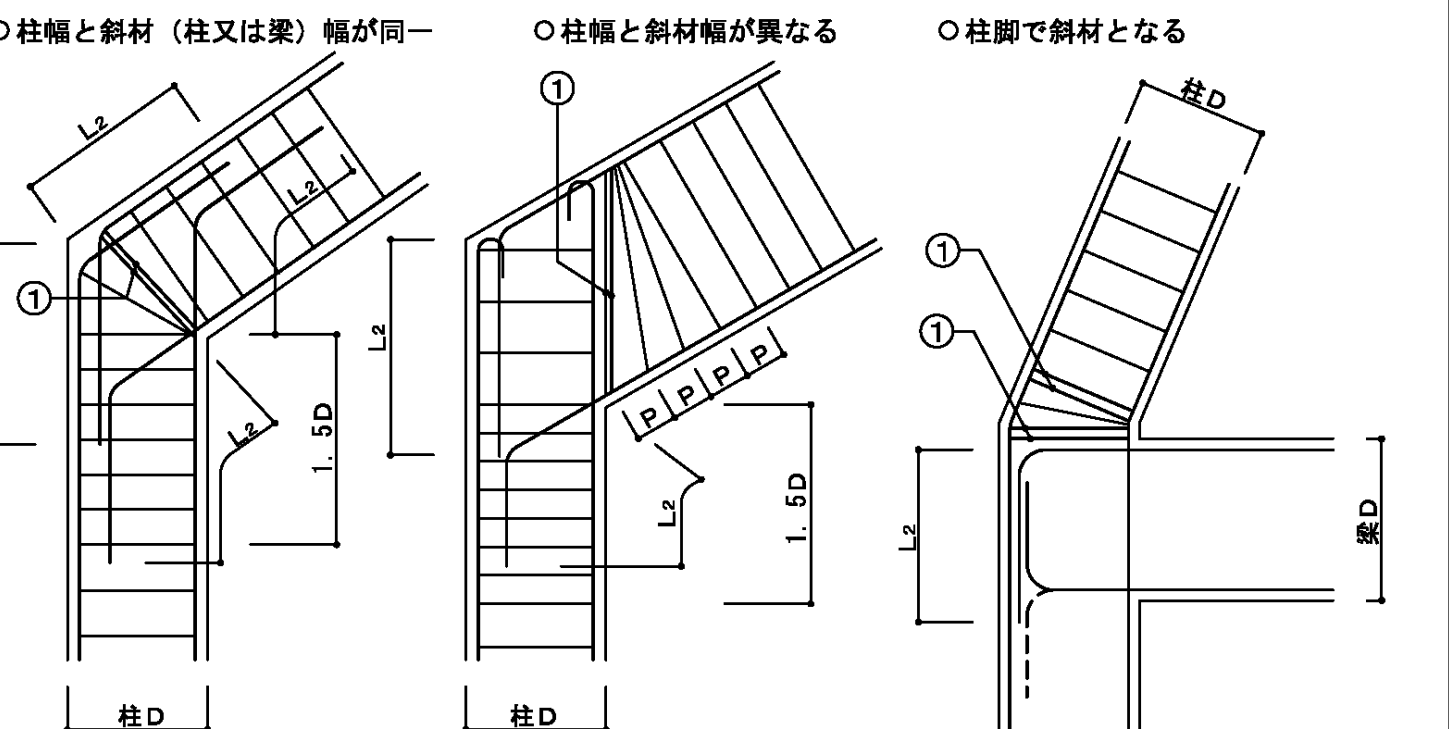
(1) 柱主筋の継手



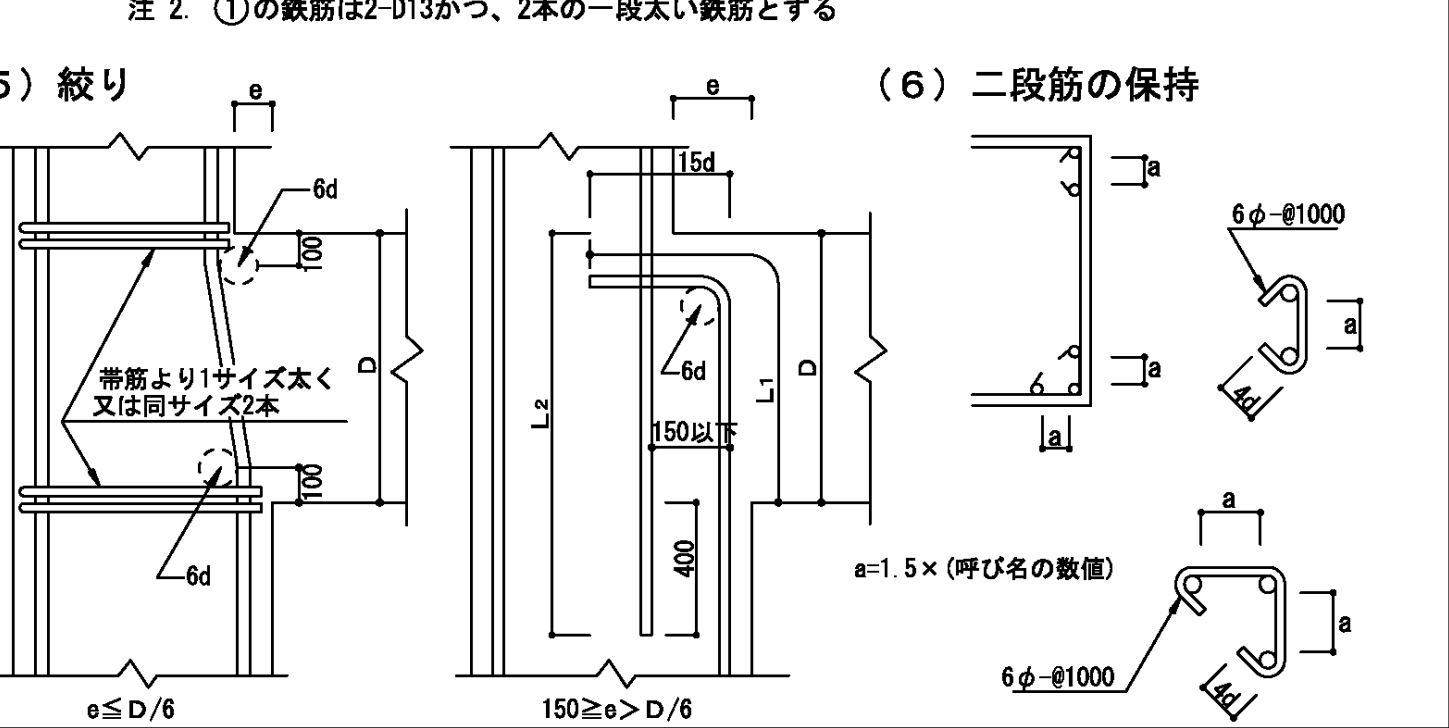
(2) 柱主筋の定着



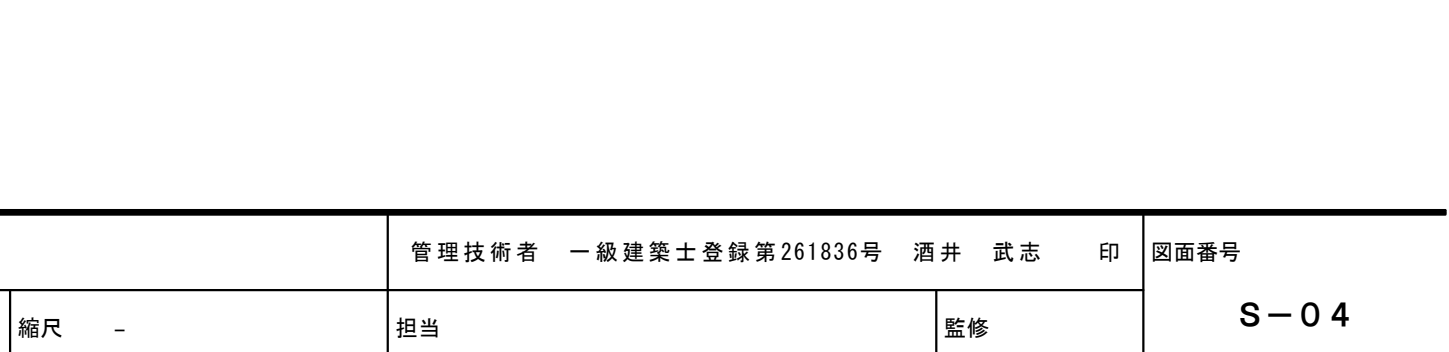
(3) 帯筋



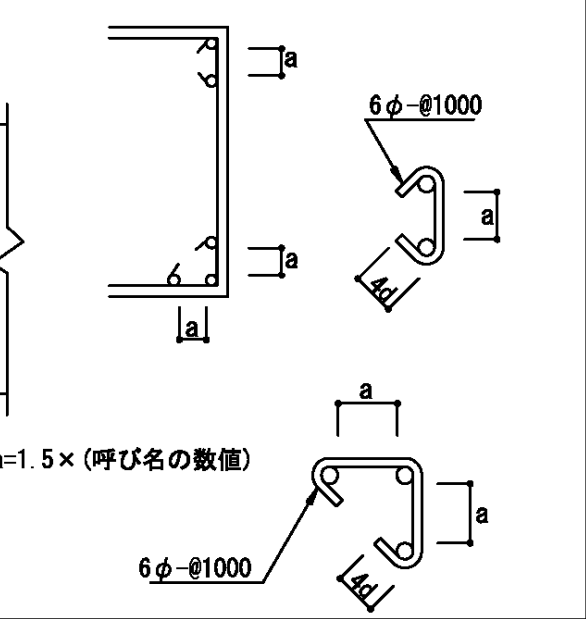
(4) 斜め柱・斜め梁



(5) 絞り



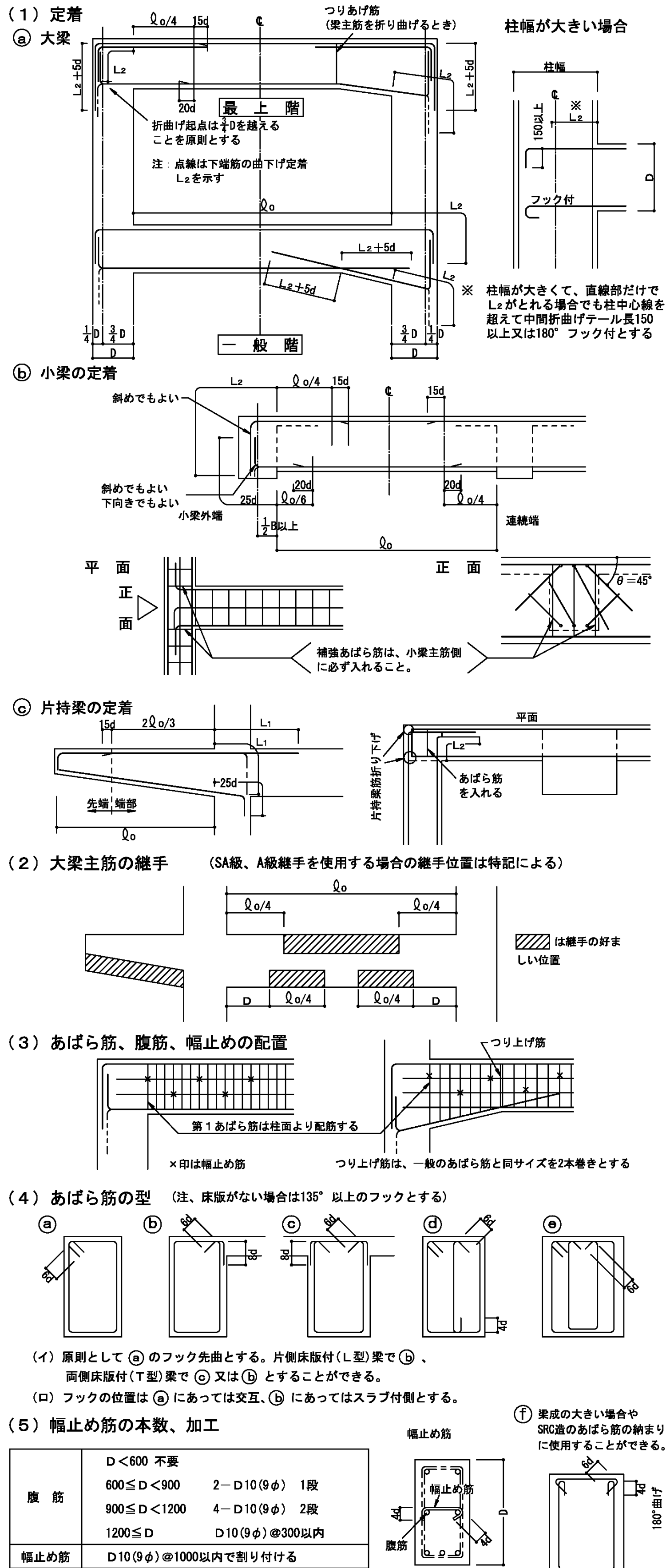
(6) 二段筋の保持



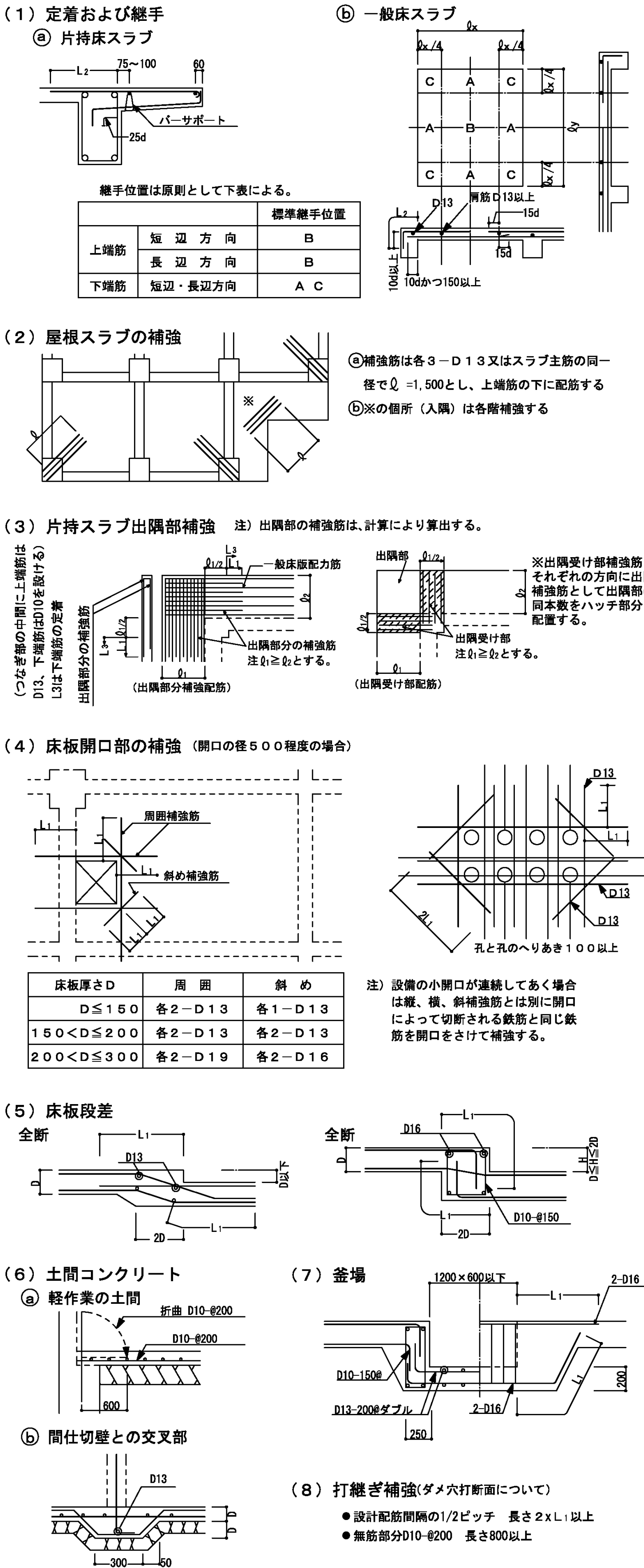
鉄筋コンクリート構造配筋標準図（2）

※修正箇所は下線を引くこと
L=本構造配筋標準図(1)の2-(3)による。

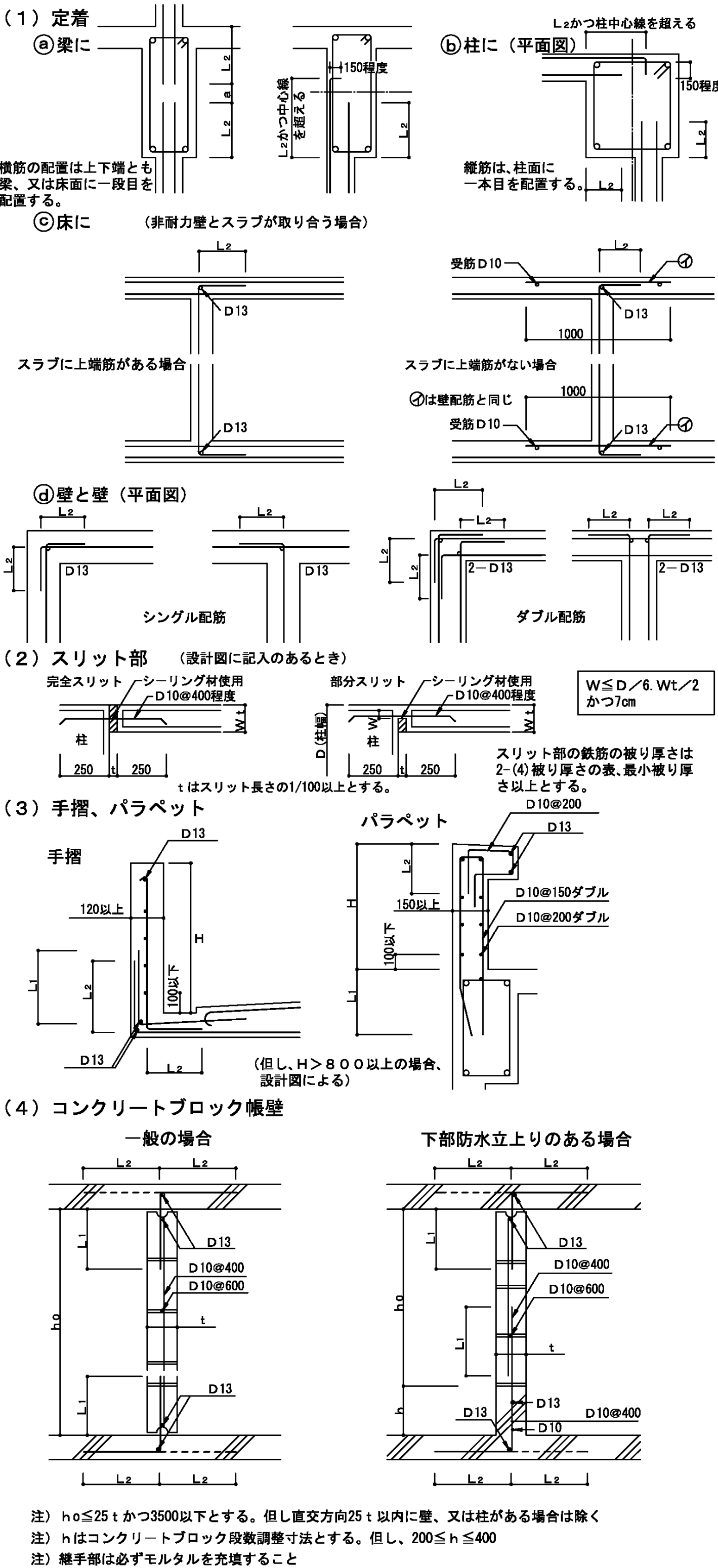
7. 大梁、小梁、片持梁



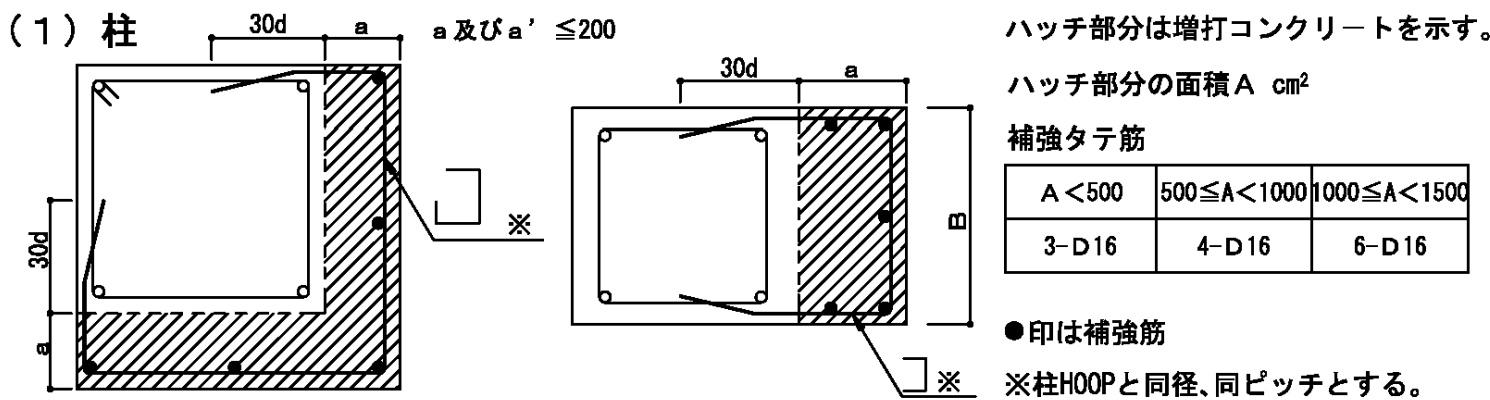
8. 床板



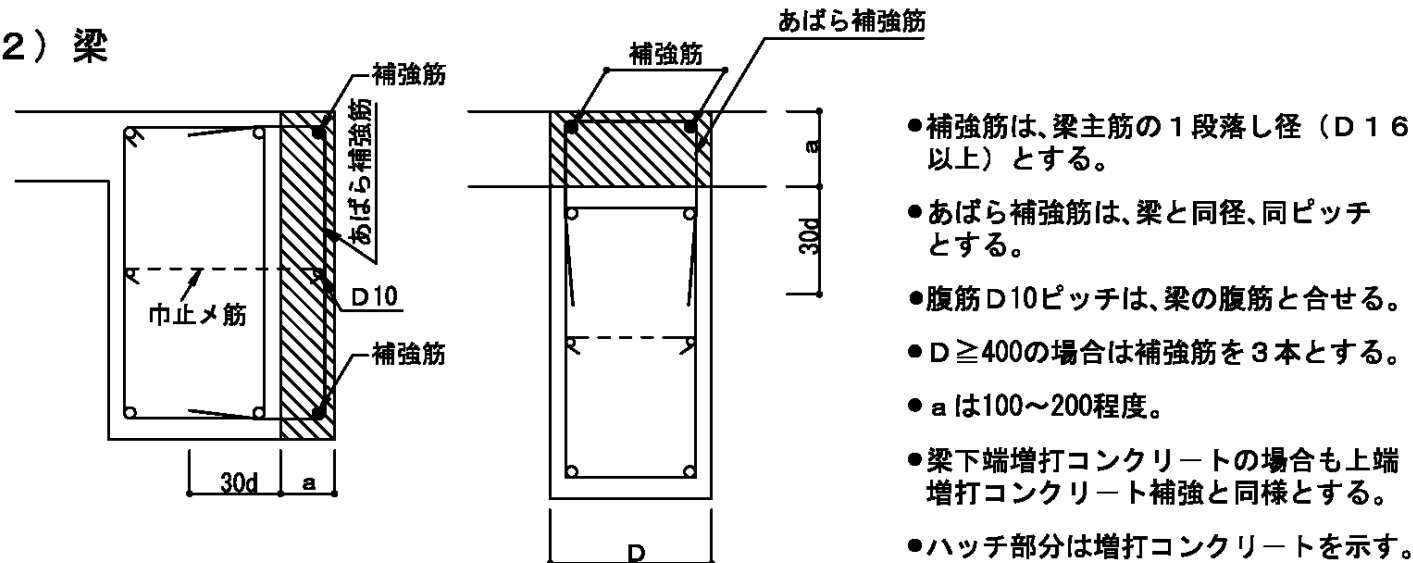
9. 壁



10. 柱、梁増打コンクリート補強



(2) 梁

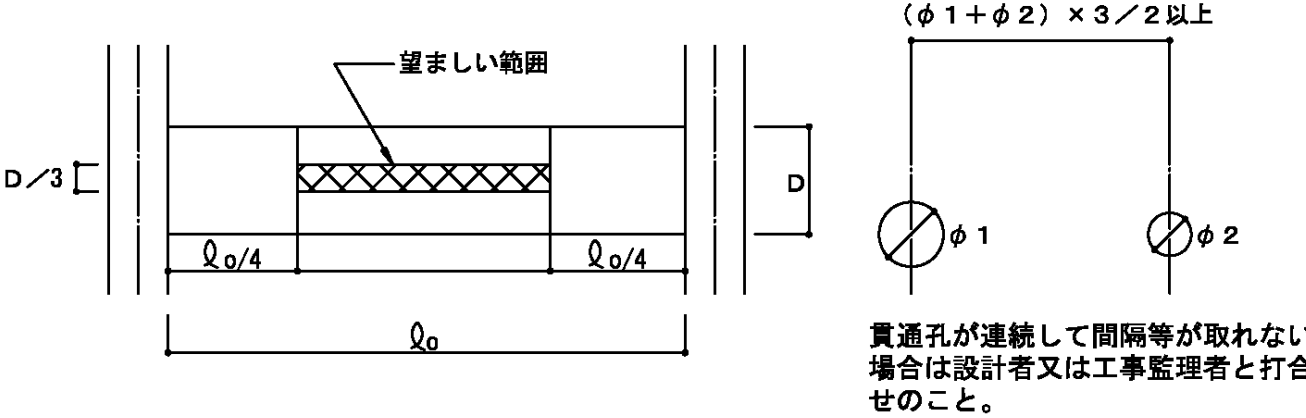


11. 梁貫通孔補強

（開口補強筋については計算により確認すること）

(1) 設置可能範囲

梁端部（スパン l_0 ／10以内かつ2D以内）は原則として避ける



(2) 鉄筋標準配筋

但し $\phi \leq D/3$ とする

80≦ ϕ ≦100 折筋 2-(2-D13) 縦筋 ST 2-D13	100< ϕ ≦150 折筋 2-(2-D13) 縦筋 ST 2-D13 #50 横筋 2-(2-D13) 上縦筋 ST 2-D13 #50 下縦筋 ST 2-D13 #50	150< ϕ ≦250 斜筋 4-(2-D13) 縦筋 ST 2-D13 #50 横筋 2-(2-D13) 上縦筋 ST 2-D13 #50 下縦筋 ST 2-D13 #50
--	---	---

孔補強の有効範囲と定着長さのとり方

※部分については計算で確認された場合は左記の位置、寸法によらずに良い。

(3) 既製品

（使用する際には、設計者又は工事監理者と打合せのこと）

ウェブレ、ダイヤレン 等 日本建築センター評価取得品とする。

施工前に計算書を提出し、承認を得ること。

設計時に使用する評価取得品については計算書を提出する事。

□リング型 □パイプ型 □金網型 □プレート型

12. 増築予定

（将来増築予定のコンクリート増打部分は、増築時の鉄筋継手工法を考慮して措置する）

